

Title	ベルクソンの「拡がり」について
Author(s)	中村, 雅之
Citation	年報人間科学. 1985, 6, p. 97-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6428
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部〔一九八五年二月〕
『年報人間科学』第六号 九七頁―一二一頁

ベルクソンの「拡がり」について

中
村
雅
之

ベルクソンの「拡がり」について

その副題「心身関係についての試論」が示すように、ベルクソンの『物質と記憶』は心身問題の克服を大きな目途として書かれた書物である。彼の見解は主として第四章で示されるのだが、そこでは「緊張 tension」および「拡がり extension」という考え方の導入によって、心身関係にまつわる難問を乗り越えようとする試みが語られている。本論はこの「拡がり」に的を絞り、ベルクソンがこの術語によって何を語ろうとしたかを、おもに行動の側面から説明しようとするものである。

ベルクソンの「拡がり」とは、質を持った具体的な延長であるとはひとまず言うことができる。それは、デカルトの語る延長や幾何学の空間と違って等質的なものではなく、これらから明確に区別されるのである。しかし、彼は同時に「拡がりの様々な程度」についても語っている。これは何を意味しているのだろうか。事物の長さや幅が増減すると語ることは、容易に見て取れる明確な意味がある。しかし、ベルクソンの「拡がり」はけっしてそのような延長に関する個々の規定ではなく、事物の（ただし異質的な）延長そのものである。とすれば、事物の個別的な空間的規定ではなく、その空間性そのものの程度を語ることは、これに対応するどのような事態

を考えることもできぬゆえに、たんなる無意味な表現にすぎないとも思える。しかし、「拡がり」の意味を我々の身体が周囲の事物に働きかけるしかた、すなわち行動の様態と解すれば、その「程度」を語ることはけっして無意味ではないと考えられる。この解釈を提示することが本論の目的である。

以下、ベルクソンが「拡がり」について語るところを概観し(Ⅰ)、次いで拡がりの程度が行動の様々な様態として解釈されることを示し(Ⅱ)、最後に彼の知覚論を通じて、「拡がり」についての統一的理解がえられることを述べる(Ⅲ)。

一

「拡がり」という術語が最初に登場するのは『物質と記憶』(以下『記憶』)においてである。先に触れたように、この術語が導入されたのは「心身結合の問題」(M.M. 200)を説明するためであった。ベルクソンによれば、心身問題の困難は我々の悟性が延長と非延長の間に設ける対立に由来する。一方に質を欠いた延長をその本性とする物質、他方に諸性質をになう非延長的な感覚を対置する

時、物質と意識的知覚、身体と精神の間には共通なものは何も見出されなくなる。このような形で問題を提出する限り、心身関係はいつまでも理解されえないだろう。悟性が設けるこの人為的な対立を乗り越え、「延長と非延長との可能な接近」(Ibid., 201)を示唆するのが「拡がり」なのである。『記憶』では拡がりの特性として次の二つがあげられている。拡がりは、(一)等質空間とは区別される「具体的延長」(Ibid., 24)もしくは「物質的延長」(Ibid., 202)であり、(二)程度を持つ。

第一の論点から見て行こう。具体的延長としての拡がりは、等質空間と常に対比され区別されることによって浮彫りにされる。ベルクソンは「空間」を等質的で無限に分割可能な、また無限性を持った、悟性の作り出した抽象的概念または図式であるとした。これらの規定は「空間、すなわち等質的かつ空虚な、無限でありかつ無限に分割しうる、どのような分割の様態にも無差別に適合する場所milieu」(E. C., 157)と一節に集約されている。具体的延長としての拡がりは、これら一つ一つの規定と対照的な性質を持っている。すなわち、それは異質的で不可分であり、有限で、具体的知覚のうちに与えられたものである。言い換えれば、具体的延長とは知覚に与えられた内容のことであり、「感覺性質の多様」(M. M., 244)に他ならない。「拡がりは知覚の最も明白な性質である」(M. M., 276)。物質の本性であるとされた具体的延長としての拡がりが、我々の知覚内容でもあるとするのは奇異に思えるかもしれない。しかし後述のように、一定の条件下ではベルクソンにとっては物質の

存在とその知覚とは全体と部分の関係にあり、両者の間には程度の差異しかないとされるがゆえに、拡がりは物質の本性であるとも知覚内容の性質であるという言い方が許されるのである。

先に触れたように、「拡がり」という術語そのものが登場するのは『記憶』が最初のだが、具体的延長と等質空間との区別はずでに『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』)の中でも「延長の知覚と空間の概念とを区別しなければならぬだろう」(D. I., 71)として強調されている。さらにこの論点は『創造的進化』(以下『進化』)に至っても変わることはない。

「この種の場合『空間』はけっして知覚されない。それは概念されるだけなのだ。知覚されるもの、それは色彩を帯びた、抵抗のある、実在的物体ないしその要素的な実在的部分の輪郭が描く線に従って分割された、延長なのである。」(E. C., 157) □内は引用者、以下同。

こうして等質空間と具体的知覚ないしは具体的延長としての拡がりとの区別は、ベルクソンの基本思想の一つに数え上げられるのである。ベルクソンはたんに持続と空間とを区別しただけではない。継起的持続と相互外在的空間との峻別という論点が最も先鋭に主張される『試論』においてさえ、いま見たように、空間と持続のみならず空間と具体的延長とを区別しなければならぬ、と説かれているのである。そして逆説的に響くかもしれないが、拡がりは質的で、不可分であり、具体的に与えられているという点で空間よりは持続に近いものである。

このような質を伴った「拡がり」を本性とする物質を、等質空間と混同するところから心身問題の困難が生ずるとするのがベルクソンの一つの論点である。物質の本性は等質な延長ではない。彼によると、等質空間は認識ではなく行動のために悟性が生み出した道具ないし図式なのである。それゆえ、等質空間は物質の本性に属するのではなく、物質の使用にかかわるのである。このような行動の図式としての等質空間によらない外界の表象の可能性を、ベルクソンは動物のうちに見ている。「空間は、動物にとっては我々と同じように等質的なのではない」(D. I., 72)。動物が表象する空間は「純粹に幾何学的な図式」ではなく「各方位はその固有のニュアンス、質を伴って現われる」(Ibid.)。動物は等質空間の表象を持ちえな²²いとされているのだが、この論点も『進化』に至るまで変らない。²³「動物は我々と同じく延長した事物を知覚するとしても、恐らく「等質空間についての」いかなる観念も持たない」(E. C., 186)。こうして、等質空間の表象を持つことができるのは、人間だけであるとされる。³この表象の獲得とともに、人間が外界へ働きかけ、それを改変する能力は飛躍的に高まる。しかし、それはまさに「働きかけ」すなわち事物の利用や技術的効用に属する事柄であり、事物の本性の探究に属する事柄ではないのだ。「等質空間は我々の行動に関わるものであり、ただ我々の行動に関わるにすぎない」(M. M., 260)。このようにベルクソンはカントと共に「等質空間は、もはや図式あるいは記号の実在性以外には実在性を持たない」(Ibid., 247)として空間をその内容から分離したのだが、しかしその反面カント

と異なり、等質空間を認識の制約とはせずに行動の図式だとしたのである。事物に有効に働きかけ思いのままに操るためには、それを任意に分割できなければならない。この任意な可分性の図式、無限可分性の図式が等質空間なのである。ところが、事物に働きかけそれを利用するための行動の図式にすぎないものを、我々は事物の本性であると錯覚してしまふ。ここから、等質でしかも無限に分割しうる延長という物質の捉え方が生まれてくる。しかし、物質をこのように把握すると、仮定によりそれは質を欠いているのだから、我々が知覚するような事物の諸性質は我々の精神が物質に付け加えたものであることになるだろう。錯覚などの経験的事実も、この仮説を支持しているように見える。ところが精神は物質と本性を異にするがゆえに、純粹な非延長とされるのだから、等質的延長としての物質と非延長的な諸性質の間には共通なものは何も見出せなくなってしまう。これを救済するには予定調和にでも頼る他ないだろうが、これは明らかに問題の回避である。こうして、物質の存在と物質の知覚、身体と精神の関係は理解不能におちいるだろう、とベルクソンは言うのである。

問題の発端は明らかに、物質の存在を等質空間と混同したところにある。物質の存在は等質的ではなく異質的な延長、すなわち「拡がり」なのである。この点で、ベルクソンは物質の存在を物質についての我々の知覚に近づけたと言うことができる。後述するように、記憶力の寄与分をのぞいた極限状態の知覚である「純粹知覚」は物質界に対して部分と全体の関係にあり、両者の間には本性の差異で

はなく、程度の差異しかないとされるのである。こうしてベルクソンは「拡がり」という考え方によって物質と知覚を接近させ、心身関係を説明しようとする。しかし、この考え方の十全な発展を見届けるには、さらに「拡がりの程度」を検討しなければならぬ。

「拡がりの程度」という考え方は、ベルクソンの心身関係論において要になる思想であるにもかかわらず、『記憶』ではわずかにしか言及されていない。同書の末尾近くで、我々の精神は「觀念からイマージュへ、イマージュから感覚へと漸進的に移行し」(N.M., 247)、そのことによって「活動性へ、従って行動へと進展するにつれて拡がりへと近づく」(ibid.)が、この拡がりはどこまでも異質的で不可分なのだから心的状態とはいかなる意味でも不調和を来たさない、と述べられているに止まるのである。『記憶』では『試論』でも述べられていた具体的延長としての拡がり、すなわち「分かれたる延長と純粋な非延長の中間にある何ものか」(ibid., 276)である拡がり前面に押し出されており、「拡がりの程度」についての記述は乏しい。この考え方の充分な展開は、次の『進化』を待たねばならない。

『進化』においては「拡がりの程度」が、精神の弛緩の様々な程度と同一視されて論じられている。『記憶』では緊張と弛緩は拡がりとは一応別仕立てで叙述されていたのだが、ここでは同一の事態を異なる術語で表わすものとされるのである。ベルクソンが緊張と呼ぶのは我々が行動している時に経験される精神の状態であり、行動が自由になり創造的になればなるほど、緊張の度は増すとされる。

反対に、我々が行動から身を引き離し夢想の状態に陥るとき、我々の精神は弛緩しているのだと語られる。つまり、我々の精神にはまったき自由行為の際の緊張と、完全な夢想状態の際の弛緩という二つの仮想上の極限の間に、高低さまざまな度合が存在することになる。『進化』では、この弛緩の方向に踏み出すことが同時に拡がりの方向へ、さらにはその果てにある空間の表象へと向うことでもありと主張されるのである。

「行動するかわりに夢見るにまかせてみよう。同時に我々の自我は分散してしまう。我々の過去はそれまでは不可分の推進力のうちに凝集し、それを我々に伝えていたのに、たがいに外在する幾千もの記憶内容に分解してしまう。(…)我々の人格はこうして空間の方向へと降ってゆく。さらに感覚において我々の人格は絶えず空間と相並んで歩む。」(E. C., 202-203)

「精神は時折おこる自らの弛緩、すなわち可能的な拡がり、から得た感情そのもののうちに、この空間の暗黙の表象を持っていたのである。」(ibid., 203)

すでに見たように、拡がりとはベルクソンにとっては物質の本性であるのだから、拡がり―弛緩の方向へ踏み出すことは、また物的なものに近づくということでもある。彼によれば、心的存在は緊張の方向に、物的存在は弛緩―拡がりの方向に傾く傾向である。緊張の逆転としての弛緩―拡がりの方向の延長上に見出されるのが、物的存在なのである。「物的なもののは心的なものとなる逆転にすぎない」(E. C., 203)。ここで物質あるいは物的なものと呼ばれて

いるものは、もちろん個々の物体ではなく、物質の全体すなわち物質界である。『記憶』の第一章では物質界は「イマーシユの総体」として捉えられ、物質も全体として見れば「全てが平衡し、相補い合い、中和し合っている意識のようなもの」(M.M., 246-247)とされている。すでに触れたように、ベルクソンは物質と我々の知覚とを接近させている。緊張の逆転、中和化された意識という捉え方が示すように、物質の存在は心的なものとは無縁なものではないのである。しかし、ベルクソンにとって実在を構成するのはここまでであって、等質空間は知性の生み出した図式であるとされる。

我々の知性は弛緩―拡がりの方向へ一度踏み出すと止まることを知らない。知性がこの運動の果てに物質をいわば通り越して到達する図式が、等質空間であるとされる。知性はこの無限可分性の図式をいったん所有すると、これを利用して本来不可分であるはずの物質を、みずからの必要に応じて思いのままに分割できるようになる。この無限可分性の図式である等質空間と、異質的で不可分な拡がりである物質との混同が心身関係を理解不可能としてしまう、と『記憶』に述べられていることはすでに指摘した通りである。このように『進化』では精神、物質、空間は、緊張ないしは弛緩―拡がりの様々な程度に対応するものとして統一的に把握されるに至るのである。

以上、具体的延長としての拡がりや拡がりの様々な程度について、ベルクソンの三著に現われた叙述を概観してきた。問題は最初に述べたように、「拡がりの程度」という考え方の内実を問うことであ

った。それは『進化』ではいま見たように「弛緩の様々な程度」として捉えられている。そして弛緩の各程度は精神、物質、空間といったものに対応している。我々がときおり経験する精神の弛緩は、これら三者に対応する弛緩のほんの一部にすぎないのであるが、しかしたんに「精神の弛緩」と言い換えただけでは、その内容は依然として明らかにならない。我々の考えではそれは行動の観点から捉え直す時、明確な姿を現わすに至るのである。

二

拡がりに程度があるとはどういうことなのだろうか。この節の基本方針は、拡がりという術語から空間性にかかわる意義をいったん取り去り、『進化』の叙述に従ってこれを弛緩と同一視し、しかも行動の観点から眺め直すという行き方である。

『進化』では弛緩 *détente* と拡がり *extension* は、ともに緊張 *tension* の逆転として同一の事態の異なる呼称であるとされていた。そこで精神の緊張―弛緩として表現されている事態を、日常語からの連想に止まらず正確に特定しなければならない。すぐに見て取れるのは、ベルクソンにおいてはこれらの術語が精神の状態を表現すると同時に、行動の様態をも表現している点である。例えば、緊張については次のように述べられている。

「(…)我々は意志のバネが極限にまで緊張するのを感じる。我々は自らの人格の激しい自己収縮によって、逃れ去る過去を取り

集め凝縮し不可分にして、現在のうちへと前進させなければならぬ。こうして過去は現在のうちに取り入れられることによって現在を創造する。我々が自己そのものを、この点に至るまで取り戻す瞬間は非常に稀れである。それは我々の真に自由な行動と一つのものでしかない。そしてその時でさえ、我々は完全に緊張しているわけでは決してない」(E. C., 201)

ここでは精神が緊張の方向に向かえば向かう程、行為はそれだけいっそう自由なものになる、と語られている。そして完全に自由な行為とはたんに仮想された極限である以上、完全な緊張も我々人間にあつては決して実現されない。行動の観点から捉える時、緊張とは自由な行為に他ならないと言える。

とすれば、逆に弛緩の方向に踏み出す時、我々の行動が惰性的なものへとおちいって行くであろうことは容易に想像される。精神の緊張を緩めるにつれて、行動は次第に自動的に反射的なものに近づいて行くだろう。この弛緩―拡がりへの方向を仮想的に進めた先に見出されるのは、完全に惰性的な振舞いをする物質の存在であろう。結局、弛緩―拡がりに向うとは、我々の身体が周囲のイマージュ(物体)と同じく自らがこうむる作用に比例した反作用を投げ返すだけの惰性的存在に近づいて行くことなのだ、と解釈することができるのである。そこでは緊張の場合とは逆に、過去は現在のうちへと送り込まれず、したがって過去の経験に基いた未来の行動の「選択」も待機もなされなくなる。こうして我々の身体は、周囲の刺激を無差別に受け取っては送り返すだけの惰性的なイマージュにます

ます接近するだろう。ところで、この「選択」こそ『記憶』の第一章で述べられていたように(M. M., 35)、ベルクソンにとっては精神と呼ぶものの最初の萌しに他ならない。行動する存在とは、また選択する存在でもある。彼は「意識とは選択の同義語である」(E. S., 11)とさえ言う。このように、ベルクソンにおいては精神の存在をも行動の側面から捉えようとする視点が常に伏在しているのである。またこれも同書で述べられていたように、物質界とは自然法則に従って他のあらゆるイマージュと連帯し作用し合う「イマージュの総体」なのだから、弛緩―拡がりへと向うにつれて我々の存在は物質界のたんなるイマージュへと埋没して行くのだ、とも言えるであろう。そのとき身体は「不確定の中心」であることをやめ、必然的法則に支配された連関の中に組み込まれることになる。

以上のように、「拡がりの程度」とは行動の様々な様態を指すものであると解釈される。我々の行動 action は物体の振舞いとあまり変わらないものから日常のなかば惰性的な習慣的行動をへて、真の自由行為に至るまで無数の段階を持っている。精神が緊張の方向へ向うとはこの階梯を自由行為の方へと登って行くことであり、弛緩へ向うとは惰性的作用 action へと降って行くことであると考えられるのである。

さてここで次の節に移る前に、ありうる疑問をひとつ解いておかなければならない。ベルクソンは「拡がりの様々な程度」によって心身関係を説明しようとするのだが、これは彼によって「本性の差異 différence de nature」があると考えられていた精神と身体(ないしは

物質)との關係を、單なる「程度の差異 *différence de degrés*」しかないものとして捉えることになりはしないだろうか。「記憶」では「本性の差異」と「程度の差異」という対比が頻出する。脳の知覚機能と脊髄の反射機能との間、イマジユの存在とイマジユの知覚との間にはたんなる程度の差異しかないとされる。前二者の間にはたんなる複雑さの違い、後二者の間には全体と部分の關係しかないからである。これに対して、外的知覚と痛みなどの感情感覺との間、記憶内容 *souvenir* と知覚との間、記憶力 *mémoire* と脳の機能との間には本性の差異があるとされる。この最後の対比、すなわち記憶力(精神)と脳(身体)の間には本性の差異があるという主張は、拡がりの様々な程度によつて精神と身体を統合するという主張と矛盾するのではないだろうか。ベルクソンは、身体と精神の區別を延長対非延長の図式で考へる空間的區別に代へるに時間的區別をもつてし、時間的區別は「程度を容れる」ものであると云う。この主張は、記憶力と脳の間には彼が設けた本性の差異を反古にしてしまふのではないだろうか。「本性の差異」と「程度の差異」との峻別はベルクソンがとりわけ強調するところであり、一方の關係を他方のそれと取り違へるところから多くの哲學的難問(あるいは偽似問題)が生じるとされている。ところが今やベルクソン自身が二つの差異の混同におちいついてるように見えるのである。

この問題に関してはドゥルーズの指摘が示唆に富んでいる。程度4の差異は差異の程度ではない、と彼は強調する。拡がり(弛緩)あるいは緊張には様々な程度があるのだが、これら諸々の程度の間には

あるのはたんなる程度の差異ではないのだ。拡がりの程度の間にあるのは本性の差異である。偽似問題が生じるのは、これら拡がりの程度の間にはたんなる程度の差異をしか見ないからなのである。

「なるほどベルクソンは程度に立ち還るが、程度の差異に立ち戻るのではない。存在のうちには程度の差異はないが、差異5、そのもの、程度がある、というのが彼の考え方の全てなのだ。」

ドゥルーズは、拡がり(あるいは緊張)の諸々の程度の間にはたんなる程度の差異を見てはならないことを教えてくれる。拡がりの程度とは光のスペクトルのようなものである。各々の色の間にはたんなる程度の差異ではなく質的な差異があるが、ある色から次の色へは漸進的な移行が可能である。それゆゑ、拡がりの程度とは行動の様々な様態であるとする本稿の立場からすれば、行動の各様態間にもたんなる程度の差異ではなく質的な差異がなければならぬだろう。事態がまさにその通りであることを次節では示すつもりである。しかし、さしあたっての課題は拡がりの二側面、すなわち具體的延長としての拡がりとは拡がりの様々な程度とを統一的に把握することである。

三

拡がりの様々な程度とは行動の様々な様態に他ならない、と先に述べた。しかしこのように解釈すると、二種類の「拡がり」があることになりはしないだろうか。すなわち具體的延長としての拡がり

と行動の様々な様態としての拡がりである。一見すると、二つの拡がりの間に関係はないように見える。一方は物質の存在しない我々の具体的な知覚内容に関わるものであり、もう一方は我々の行動に関わるものであるからだ。そうすると、ベルクソンが extension という一語で表現したものに二義を区別しなければならぬということになるのだろうか。

これはいかにも不自然な考え方である。しかし、『記憶』第一章で展開されたベルクソンの知覚論からいま一度「拡がり」という考え方を眺め直すとき、右のような見かけの二義は統一されてしまう。このことを本節で示そうと思う。ただし、本論はベルクソンの知覚論を主題とするものではないので、目下の課題にかかわる限りで概観するにとどめる。

知覚を行動の観点から捉えようとすること——これがベルクソンの知覚論の、まず第一に挙げなければならない特徴であろう。知覚は事物を認識するためではなく、我々が事物に働きかけ利用するためである。ひとこと言えば、知覚は行動を導くのである。ベルクソンは、知覚を知覚の基礎として捉えるような思弁的な見方を、事物の使用にかかわる行動の観点に移行させるのである。ベルクソンがその知覚論を構成するに当ってまず出発するのは、「イマーシユの総体」からである。既述のように、イマーシユの総体とは物質界とふつう呼ばれているもの、すなわち我々の知覚から独立にそれ自体で存在し、自然法則に従って相互に作用し合う事物の総体とほぼ同義である。異なるのはこのイマーシユの総体が、「出現しようとする

るまさにその瞬間に相殺されてしまう」(M. M., 279) 意識として把握されている点なのである。イマーシユの総体あるいは物質界は、自然法則に従って、厳密に受けただけの作用に対して反作用を投げ返す場であり、ここには不確定性の入り込む余地はない。ある物体の任意の時刻の振舞いは、もし条件が全て知られているなら、計算可能なものとして正確に予見されるだろう。今このイマーシユの総体のうちに生体と呼ばれるものが出現したならば、不確定の要素が持ち込まれることになる。なぜなら生体は惰性的なイマーシユとは異なり、周囲のイマーシユから被る可能な作用の中からみずから利害にかかわる作用だけを選び出すこと、また反射的な応答をせずに行動を延期することができるからである。つまり、生体の出現に伴って、イマーシユの総体のうちに選択および待機という不確定の要素が導入されることになるのである。

さてベルクソンは、この不確定性から意識的知覚の出現を説明しようとする。そのために彼は意識的知覚の諸条件を単純化し、現実の知覚から記憶の寄与分を取り除いた「純粹知覚」という事実上よりも権利上存在する知覚を想定する。このように単純化された条件のもとで、イマーシユの存在からイマーシユの表象を導出するには、それが我々に及ぼす全作用の中から我々の利害にかかわる作用だけを選択すればよいのだ、と彼は言う。この選択によって、生体が外的対象から受ける作用はそれだけ減少する。「それらの作用のこの減少こそ、まさしくそれらについて我々が持つ表象なのである」(M. M., 34)。つまり表象とは存在に何ものかを付け加えたものではな

く、反対に存在の幾分かを減少させたものなのだ。ところで、我々の利害にかかわる側面とは、我々が影響を及ぼしうる側面でもある。この意味で、事物の可能的作用の選択とは、我々の可能的行動の選択に他ならない。現実的行動が唯一の可能な行動である際には選択の余地はない。しかし可能的行動がいくつか示唆されている場合には、その中から選択をすることができるのである。可能的行動は我々の利害にかかわる事物の側面を示唆し、この側面は逆に事物に対する可能的行動を我々に示唆するだろう。だから知覚は事物を写した写真のようなものではなく、むしろ絶えざる問いかけと応答からなる回路あるいは反射になぞらえるべきなのである。「それゆえ、これらの対象は私の身体のありうる影響を私の身体に投げ返すのである。(…)私の身体を取り巻く対象は、それらに対する私の身体の可能的行動を反射する」(M. M., 15-16)。このような可能的行動の選択あるいは同じことだが事物の可能的作用の選択こそ、意識的知覚の本質であるとベルクソンは考えた。この観点からイマージュの総体すなわち物質界を振り返る時、それは表象が生まれ出ようとする瞬間に相殺され中和されてしまう潜在的知覚であることがわかる。知覚(表象)を生み出すことなどできない。それはイマージュの総体として最初から、ただし潜在的な形で与えられているのである。我々はそれを現実化させるだけなのだ。こうしてイマージュの存在とその知覚とは全体と部分の關係にあり、両者の間には程度の差異しかないとされる。純粹知覚においては精神は事物の一部を成し、物質と直接的に接触すると語られるゆえんである。

以上がベルクソンの知覚論の概略である。ひとことで言えば、彼にとって知覚とは外的対象から我々の利害に関わる作用を選択すること、言い換えれば外的対象に対する我々の可能的行動の反射である。最初に触れたように、知覚は行動と不可分であるとした点が、彼の知覚論の眼目である。

さて、このような知覚の捉え方から拡がりの二義を振り返るならば、それらは一つに収斂してしまふことが分るだろう。なぜなら、拡がりとはまず等質空間と区別される具体的延長ないしは具体的知覚であったのだが、それはいま見たように、事物に対する我々の可能的行動を通じて我々に与えられるものであるからだ。一方で拡がりの程度とは行動の様々な様態であると先に解釈したのだから、具体的知覚としての拡がりとは拡がりの程度とは行動の観点から眺めるとき、統一的に把握されるに至るのである。もとよりこれは知覚とは行動である、ということではない。知覚そのものは既述のように、イマージュの総体として潜在的な形ではじめから与えられている。この言わば潜在的知覚が我々の知覚となるのは、事物に対する我々の可能的行動を通じてなのだ。この意味で、行動する存在のみが意識的知覚を享受することができる、と言えるだろう。

ところでベルクソンはその知覚論において、可能的行動と現実行動という区別をさかんに用いている。次にこの区別を手掛りに、これまで一括して「行動の様態」と呼んできたものの内実を探ってみることにしたい。

弛緩—拡がりに向うとき、我々は「夢想の状態」におちいるとき

れていた(11ページ参照)。行動に着目する時、この夢想状態とはどのような状態なのだろうか。睡眠中文字通り夢を見ている時のように、行動の停止状態にあることはすぐに見て取れる。しかし夢想の状態は、たんに現実的行動の不在によって特徴づけられるわけではない。より重要なのは、可能的行動も閉ざされているという点なのである。弛緩―拮がりへ向うとは物質の状態に近づくことであるとされていた。物質の振舞いは選択の欠如によって特徴づけられるが、選択の欠如とは可能的行動の不在をも意味する。それゆえ、弛緩―拮がりによっておちいる夢想の状態は可能的行動の不在によって特徴づけられるのである。この論点は、外面的には夢想状態と同じく現実的行動を欠いている次の状態を思い浮かべれば、より明確になるだろう。何か重大な決断をするために集中している時、我々の脳裡には複数の選択肢が相拮抗している。可能的行動は我々の前にあるのだがいずれも等しい力で己れを主張し、いわば平衡状態にあると言える。このとき意識は緊張の極にあるだろう。夢想の状態とこのような決断のために張りつめた思索とが対極に位置するという事実は、現実的行動の有無からは明らかにならない。両者を正反対の方向に位置づけるのは、可能的行動の有無なのである。可能的行動という概念が行動の様態を区別するために有効であることは、弛緩のもう一つの例として挙げられている夢遊状態を考察することによってさらに明確になるだろう(E. C., 145)。夢遊状態を含む自動症においては、患者はある程度まとまりを持った現実的行動を展開するのだが、意識はなくその間の記憶も残らない。我々の身体はこの

ときほとんど自動機械と選ぶところがないものとなり、弛緩の現実的極限にあると言える。そしてこの自動症を夢想状態と共に弛緩の方に位置づけ、決断に際しての緊張と位置させるのは、前者は可能的行動をすなわち選択を欠いているという事実なのである。自動症は極端な事例であるが、我々が機械的に習慣的行動を営む場合にはこれに近い状態に置かれる。歩くこと、箸を使うこと、本のページをめくること、さらには通い慣れた道を往復することさえ、我々はほとんどそれと意識せず、またそうであればこそやってのける。習慣的な一連の行動は自動的にまた機械的に繰り返されるものであり、ここでも選択や決断の、従って現実になされる行動以外の可能的行動の介入する余地はほとんどないのである。可能的行動の出現に伴なって意識が、従って意識的知覚が登場する。このことはたとえ新しい行為を習得しようとしている場合などから推察されるだろう(E. S., 11)。そこでは事態は習慣的行動とは全く逆の様相を呈してくる。我々は習得しようとする行為とみずからの身体運動とを絶えず比較し、みずからの動きを修正しつつなすべき運動を選択し決定しなければならぬ。このときみずからの行為に対する我々の意識は目覚め、意識的知覚が伴なうことになる。さらに今まで経験したことのないような状況に直面し、何らかの決断を下して行動を取らねばならないとき、意識はいっそう覚醒し緊張する。このような状況から生まれる行為が自由な行為であると言える。

こうして夢想状態や自動症や反射行動を現実の極限とし(仮想される極限は物質の状態である)、習慣的行動を経て自由行為へと至

る行動の様々な様態は、可能的行動の有無とその強度から理解されるのである。そうであるならば、夢想状態等と習慣的行動との間、習慣的行動と意識的で自由な行為との間には、たんに程度の差異ではなく質的な差異があることは容易に了解されるだろう。意識的行為とそれ以外の行動とは可能的行動の有無という点で決定的に異なっている。また意識の緊張が増すということは、たんに行為者に開かれている可能的行動の数が増大するというのではなく、その質や強度に関わることだろうからである。現実的行動が可能的行動を伴なうとき、はじめてそれを「行為」と呼ぶことができる。行為とは、可能的行動を自らの回りに暈のように従えている現実的行動であると言えよう。さらには意識的知覚の出現も可能的行動の登場と時を同じくする。ベルクソンは意識を常に選択によって基礎づけた。彼にとって「意識とは選択の同義語」(E.S., II)であり、それはまた「潜在的活動と現実的活動との引き算として定義される」(E.C., 145)のである。我々の可能的行動の及ぶ範囲は知覚の及ぶ範囲でもある。この意味で拡がりとは、事物に対する可能的行動の拡がりであるとも言えるだろう。ここに至って、可能的行動あるいは選択という概念によって意識的知覚と行動の様々の様態とが結びつけられ、「拡がり」の統一的理解が得られたと結論できるのである。

四

拡がりの様々な程度とは行動の様々の様態のことであり、具体的

延長としての拡がりとは可能的行動の(同じことだが事物の可能的作用の)選択によってイメージの総体から裁断され、我々に与えられる。

最後にこうした解釈に対して予想される反論を検討しておこう。本論では、ベルクソンの拡がりを首尾一貫して行動の側面から捉えようとしてきた。しかし、ベルクソンこそは行動のために作られた様々な枠組を批判し、行動に動機づけられ有用性を目指す思考法から脱却して行動の観点から認識の観点へと移行することによって、「真の实在」を把握することが可能になると主張し続けた哲学者であったのではないか。行動と行動の道具である諸々の概念とは、彼にとつては真の認識の妨げであり除去すべき邪魔物でしかなかっただろう。このことを典型的に示しているのが、すでに述べた行動の図式としての等質空間である。この任意な無限可分性の図式が本来は不可分である物質に適用される結果、物質が無限に分割しうる等質的延長であるという錯覚を生み、それとともに行動の要求に従った作為的分割が独立な諸物体を生み出す。ここからゼノンの背理や心身問題の困難が生まれるとするのが彼の論点であった(M.M., 235, 236)。とすれば、彼がまさにその心身関係の説明原理として導入した拡がりを、行動の観点から把握しようとする本論の解釈は倒錯もはなはだしいのではないだろうか。

しかしこの反論は当たらない。行動とは功利的行動だけではないからだ。たしかにベルクソンは、行動のための原理が認識の領域を侵犯することを常に警戒し批判した。だが彼が批判したのは功利的な

あるいは実用的な行動のための原理に限られる。一方で彼は、創造的なあるいは自由な行為をきわめて重視していたのである。そのことは、彼が行動を精神と身体の統一の存在理由であるとみなしているという一事をもってしても明らかであろう。したがって「拡がり」を行動の観点から捉えようとする本論の試みは、彼の哲学と何ら抵触するものではない。ベルクソン哲学は、一面では、行為の哲学であると言えるほどのだ。

とはいえ問題が残らないわけではない。一方に功利的行動、他方に創造的行為という二分法だけでは明らかに不十分であり、両者の関係を探る必要があるからだ。本論ではこの関係を明示するにまでは至らなかったが、創造的なもしくは自由な行為が固定化され、いわば沈滞したものが、ベルクソンが批判したような功利的行動の一つの側面であるだろうとは言っておきたい。習慣的な創造行為とは形容矛盾だろう。またベルクソンは等質空間という網の目によって、事物を裁断し利用する営みを功利的であるとすると、そのような方法によって多くの創造的な技術的成果が生み出されているのも事実である。等質空間の表象をもとにした行動が功利的で、そうでない行為は創造的だという単純な二分法は実情に合わないだろう。この点で、ベルクソン哲学における等質空間という概念の位置づけを明確にすることが、今後の課題として残されている。さらに、行動に着目して「拡がり」を捉えるという本論の試みが正当化されるにしても、「拡がり」の意義がそれに尽きるものであるかどうかには疑問が残る。たとえば「選択」を取ってみても、それが可能であるた

めには可能的行動を表象し、その中から選択を行なう主体を必要とするのではないだろうか。ベルクソンがそう考えていたらしいことは、神経組織の発達に伴なう生体の行動範囲の拡大の背後に、意識の緊張の増大を見なければならぬ (M. M., 280) としている点からもうかがえる。行動は、その名に値しない惰性的状態から習慣的行動をへて自由行為に至るまで、無数の段階を持っている。その背後に実体としての心を想定するか否かは、この小論の範囲を越えた問題である。これに関連することだが、ベルクソンの「拡がり」はもともと心身関係の説明のために導入されたのだが、それを行動の観点から解釈することによって心身関係になんらかの光を当てることができたのだろうか。非常に高度な精神的働き、たとえば論理的思考などもこの観点だけで押し切ることができるかどうかは未知数である。しかし、心身のまさに接点となるところ、すなわち最も低度の精神と惰性的物質とが接するところに関してはベルクソン流の説明はうまく行っていると言える。繰り返すまでもないが、純粹知覚において潜在的意識としてのイマーシュの総体から意識が出現するのは、選択ないし可能的行動の登場と同時であるとされていたのであった。

総じて、行動の様々な状態の背後に意識の緊張、過去・現在・未来の記憶力による総合、生活への注意などの働きをになう心的なものといかなる形で認めるにせよ、これらの働きが顕在化されたその意味が読み取られるのは、やはり行動を通じてであると言えるだろう。この小論の目的は最もベルクソンの考え方の一つである

「拡がり」とは何かを行動の側面から解明することであったが、直観、持続、記憶等のベルクソン哲学の中心に位置する他の術語が、同じく行動を通じて分析する時どのような姿を現わすに至るかは今後の探究に委ねなければならない。

引用略号は以下の通り。

- (D. I.) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889, 120^e édition, P. U. F., 1967.
(M. M.) *Matière et mémoire*, 1896, 92^e édition, P. U. F., 1968.
(E. C.) *L'Évolution créatrice*, 1907, 142^e édition, P. U. F., 1969.
(E. S.) *L'Énergie spirituelle*, 1919, 160^e édition, P. U. F., 1976.

註

- (1) 不可分 indivisible という語は注意を要する。これは用語としては正確か不適切かで十分に分割しえないということではなく、分割によってその性質を変化させてしまうことを意味する。次を参照。
G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, P. U. F., 1968, 2^e édition, pp. 35-36.
(2) じじかベルクソンは動物の驚べき方向感覚を説明しようとする(D. I., 71-72)。
(3) しかし人間にも右と左の自然な区別という形で、等質空間によらない空間表象が残存してゐるとされる (ibid.)。
(4) G. Deleuze, 'La Conception de la différence chez Bergson', (*L'Étude bergsonnienne*, vol. IV, P. U. F., 1956) c. P. Deleuze, op. cit., pp. 92-95.
(5) ibid., p. 109.
(6) ここから夢想の状態は物質の状態に近いものとなる。次を参照。
Deleuze, op. cit., p. 88 n (3).

(7) 言い換えれば「最初の運動の中に最後の運動がすでに前もって形成されているような」(E. C., 145) 仕方で繰り広げられる。

(8) M. M., 248.

(9) 同じようにベルクソン哲学における行為の重要性を強調した論稿に次のものがある。

三輪 正「形而上学と行為」——ベルクソン哲学の一問題点——(坂田徳男、澤瀉久敬共編『ベルクソン研究』勁草書房、一九六一年、所収)